

やなぎみわステージトレーラープロジェクト 2017

東アジア文化都市 2017 京都「アジア回廊 現代美術展」

やなぎみわ 演出・美術

日輪の翼

にちりんのつばさ

原作：中上健次

2017 年9月14日(木)～17日(日)
河原町十条：タイムズ鴨川西ランプ特設会場

【主催】

東アジア文化都市 2017 京都実行委員会

京都市

一般社団法人 MIWA YANAGI OFFICE

【日輪の翼公式 HP】

<http://nichirinnotsubasa.com>

お問い合わせ

ハイウッド/担当：大藪もも

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 4-34-18-213

FAX: 03-3320-7219

Mail: momoyabu0202@gmail.com

携帯：090-5045-9137

日輪の翼

やなぎみわステージトレーラーが京都へ凱旋！

台湾で出会った移動舞台車(ステージトレーラー)に魅せられ、舞台車での演劇公演を企てたやなぎみわは、まず 2014 年の横浜トリエンナーレで、自らがデザインし輸入したステージトレーラーを発表、続いて PARASOPHIA: 京都現代芸術祭2015のオープニングでは二条城をバックにポールダンス公演、京都市美術館前での「キャバレーナイト」「中上健次ナイト」を上演。そのステージトレーラーを用いて試行錯誤を重ね『日輪の翼』上演へ向け準備を進めてきました。

昨年、横浜、新宮、高松、大阪と4都市公演を巡回、今年は城崎国際アートセンターでの滞在制作を経て、東アジア文化都市 2017 京都「アジア回廊 現代美術展」の出展作品として、満を持して京都公演を実施いたします。

『日輪の翼』京都公演は日韓の饗宴

出演者は、俳優だけでなく、大地を踏み鳴らすタップダンサー、天空を舞うサーカスパフォーマー、その間を結ぶポールダンサーのほか、巻上公一によるオリジナル曲を奏でるギタリスト、新内などジャンルも出自も多彩な出演者たちがさまざまな趣向を凝らし、独創的な万物照応の世界を織りなす祝祭劇です。また、今回は韓国より伝統芸能「プンムル」の使い手、林 承煥(イム・スンファン)と李 性洙(イ・ソンズ)を招聘し、更に京都・東九条マダンの皆さんとの共演が決定。

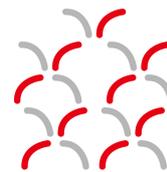
中上健次が愛した漂泊芸能・朝鮮半島のナムサダンのリズムが鳴り響きます。

東アジア文化都市 2017 京都「アジア回廊 現代美術展」出展作品

東アジア文化都市 2017 京都とは

日中韓の3箇国から選ばれた3都市が、文化芸術イベントや、交流を行うことにより、東アジアの相互理解や連帯感の形成を促進するとともに、開催都市が文化による発展を目指す事業「東アジア文化都市」。京都市は、中国の長沙市、韓国の大邱広域市とともに、2017年2月から11月にかけて、相互交流や多彩な文化事業を市民と共に実施します。

<https://culturecity-kyoto.com/>



東アジア
文化都市
2017 京都

CULTURE CITY OF EAST ASIA 2017 KYOTO

「アジア回廊 現代美術展」とは

東アジア文化都市 2017 京都のコア期間事業の一つとして、本公演に加えて、世界遺産元離宮二条城と京都芸術センターを会場に8月19日から10月15日にわたって国際的なアートシーンで活躍する日中韓のアーティスト25組による現代美術展を開催します。

<http://asiacorridor.org/>

東アジア文化都市 2017 京都
CULTURE CITY OF EAST ASIA 2017 KYOTO

アジア回廊 現代美術展
ASIA CORRIDOR CONTEMPORARY ART EXHIBITION

日本で唯一の台湾式ステージトレーラーでの、やなぎみわによる前代未聞の
野外演劇プロジェクト『日輪の翼』に是非ご期待ください！！

日輪の翼

～アジア回廊を旅する夏芙蓉～ やなぎみわ

我が舞台トレーラーは、2014年の夏に台湾の小さな工場で産み落とされ、盛大な爆竹音とともに高雄港から横浜に到着、日本に初上陸しました。「移動舞台車」というのはトレーラーの荷台が舞台になっているステージカーで、700～800台が、台湾中を駆け巡っています。冠婚葬祭、寺の祭り、選挙運動などに「貸し舞台」として出向し、油圧の力で屋根ごと持ち上がって「御開帳」すれば、内装には、けばけばしい絵柄と電飾が光り輝きます。我がトレーラー花鳥虹には、「夏芙蓉」の花の絵が描かれています。中上健次の小説に頻りに現れる架空の花です。このトレーラーを日本に召喚せねばならないと決意させた物語。それは、中上の小説『日輪の翼』でした。舞台トレーラーと中上健次は、必然のように出会いました。

海と山の狭間にある熊野を舞台に多くのサーガを紡ぎ続けた中上健次は、1982年に長編『日輪の翼』を書きました。彼は大胆にも、この作品によって、自らが紡ぐ物語そのものを、愛憎渦巻く故郷（路地）から出奔させます。トレーラーに棲む7人の老婆は、生れ暮らした地を懐かしんで語り、御詠歌を唱え、茶粥をすする生活をして、「オバラ」が行く先々は束の間の（路地）となります。同郷の運転手の若者たちは、老婆たちの望むとおりに、伊勢へ、諏訪へ、恐山へ、そして皇居へとひた走ります。終局のない巡礼を描いた摩訶不思議なロードノベルの通り、南方から黒潮にのって日本に漂着した我がトレーラーも、終わりなき旅公演を続けることになりました。

昨夏の新宮公演で、中上作品を生み出した熊野の地に別れのクラクションを鳴らしたトレーラーは、高速道路を天駆け、今年も京都の十条出口に荷を下ろします。東九条、十条は、昔から韓国はじめ多くの国の人達が共生してきた場所です。韓国併合と、幸徳秋水以下12名の死刑者を出した熊野の大逆事件は同じ1910年に起こりました。国家という共同体維持を掲げた日本近代化が落とした暗い影は今も消えることはありません。小説『日輪の翼』の終盤、天から舞い降りるように唐突に朝鮮半島の芸能者たちが現れ、老婆たちと束の間の狂舞を繰り広げます。

2017年、平穏とはいえない東アジアで、京都から私たちが冷静に歴史を見つめ、未来に向けて思いを馳せる時、熊野の路地の老婆らと、半島の放浪芸能ナムサダンの若者たちの至福の歌垣に託した中上の願いは、韓国ミュージシャン、在日の方々が共に集う祝祭の中に体現できると思います。

有翼日輪のトレーラーのもと、芸能の力で、過去と未来、聖俗、生死、男女、すべてが混合、交配する瞬間に立ち会ってください。



撮影：沈昭良

金鳥来たりて 天地交合う 夏芙蓉 やなぎみわ

日輪の翼

日輪の翼[京都公演]

2017年9月14日(木)・15日(金)・16日(土)・17日(日)

18時開演(開場は開演の30分前) ◎公演時間は約2時間30分を予定しております。

会 場: 河原町十条:タイムズ鴨川西ランプ特設会場 (野外公演)

チケット料金(全席自由席)

一般 前売 3,500円 / 当日 3,800円

学生 前売 3,000円 / 当日 3,500円

※東アジア文化都市2017京都「アジア回廊 現代美術展」チケット(使用済み可)をご提示いただくと、当日券が前売り価格となります。

※就学前のお子様はご入場できません。

先行割引チケット販売

料金:一般3,000円

期間:2017年5月1日(月)~5月7日(日)

※ぴあ、ローソンのみのお取り扱い

一般チケット発売

2017年5月8日(月)

チケット<ご購入>

・ローソンチケット 0570-000-407(オペレーター対応:10:00~20:00)

[Lコード 51740] <http://l-tike.com>

・ぴあ 0570-02-9999 [Pコード 458-710] t.pia.jp

・京都芸術センターチケット販売窓口 (10:00~20:00)

〒604-8156 京都府京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2

チケット<ご予約>

・Corich チケット! <https://ticket.corich.jp/apply/82456/>

・ハイウッド 03-3320-7217 (平日 11:00~19:00)

お問合せ先

TEL:03-3320-7217 (平日 11:00~19:00/ハイウッド)

MAIL:miwayanagiooffice@gmail.com

※本公演は台風などの荒天時は中止になります。

公演当日正午に開催の有無を決定いたしますので、

日輪の翼公式 HP にてご確認ください。

日輪の翼公式 HP <http://nichirinnotsubasa.com>

日輪の翼

原作：中上 健次

『日輪の翼』

演出・美術：やなぎ みわ

脚本・作詞：山崎 なし 音楽監督：巻上 公一

<出演者>

南谷 朝子	サンノオバ・ソノイネ	(俳優)
SYNDI ONDA	ハツノオバ	(歌手)
檜山 ゆうこ	コサノオバ	(ボイス・パフォーマー)
山本 静	ミツノオバ	(クラウン)
重森 三果	キクノオバ	(新内)
辻本 佳	ツヨシ	(ダンサー)
MECAV	タエコ、喜視	(ポールダンサー)
西山 宏幸	定男、マサオ	(俳優)
藤井 咲有里	道子、ララ	(俳優)
高山 のえみ	半蔵二世	(俳優)
上川路 啓志	田中さん、オリエントの康	(俳優)
SARO	死のう団員	(タップダンス)
サカトモコ		(空中パフォーマンス)
石蹴 鐘		(空中パフォーマンス)
松本 杏菜	キキ	(俳優)
浜辺 ふう	テツヤ	(俳優、プンムル奏者)
井尻 有美	死のう団員	(ジャンベ)
JanMah	死のう団員	(ギタリスト)

<招聘アーティスト>

[高敞プンムル奏者] プンムルとは、朝鮮半島に古くから伝わる農民の音楽と踊りの芸能。韓国全羅北道高敞に伝わるプンムルの様々な楽器を操り、歌い、そして舞う。文化本来の「深み」を追及する一方、現代的な舞台でも活躍をする稀有な奏者である。



林 承奂 [イム・スンファン]



李 性洙 [イ・ソンス]

<特別出演>

東九条マダンの皆さん

渡辺 毅 異国の楽団長
陳 太一 [チン・テイル] (プンムル奏者)

[東九条マダン] 在日の韓国人・朝鮮人と日本人が共に暮らす町・京都市南区東九条で民族や国籍、障害の有無や様々な立場の違いを超えて人々が共に集い、力を合わせて一つのマダン(広場)を創ることを目指し、1993年以來、毎秋開催されている地域の祭りです。



©東九条マダン実行委

日輪の翼

<音楽>

作曲：巻上 公一
 嶋村 泰(「オリエントの康」の一部、「甘い毒」、「俺はジュース」、他)
 南谷 朝子(「女工の歌」、「蛇の歌」)
 重森 三果(「道行」、「きょうだい心中」、「伊勢の神さんの歌」)
 編曲：嶋村 泰、西山 宏幸

<スタッフ>

照明デザイン： 藤本 隆行 (Kinsei R&D)

音 響： 高田 文尋 (株式会社ソルサウンドサービス)

演出助手： 太田 宏(青年団)

舞台監督： 大久 保歩 (有限会社クワット)

STPディレクター： 粟津 一郎

舞台監督助手： 黒飛 忠紀 (幸せ工務店)

小 道具： 許品祥

方言指導： 杉浦 圭祐

音楽指導： 荒井 康太

衣裳製作： 大野 知英

衣裳管理： 柳瀬 安里、小村 帆乃佳

広報デザイン： 木村 三晴

広 報： 大藪 もも

制 作： 井尻 有美

制作助手： 杉田 亜祐美、米田 有希

プロデューサー： 高樹 光一郎 (一般社団法人 HIWOOD)

主 催： 東アジア文化都市 2017 京都実行委員会、京都市、
 一般社団法人 MIWA YANAGI OFFICE

共同企画： 京都芸術センター

運 営： 東アジア文化都市 2017 京都現代美術部門運営委員会

助 成： 平成 29 年度 文化庁 文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業
 日本万国博覧会記念基金

公益財団法人 アサヒグループ芸術文化財団

協 賛： BAL

協 力： 城崎アートセンター(豊岡市)   おおさか創造千島財団

照明機材協力： カラーキネティクス・ジャパン株式会社、
 有限会社タマテックラボ、パイフオトニクス株式会社

企画・製作： 一般社団法人 MIWA YANAGI OFFICE



日輪の翼

『日輪の翼』 あらすじ

住み慣れた熊野の〈路地〉から立ち退きを迫られた七人の老婆たちは、同じ〈路地〉出身の若者・ツヨシらが運転する冷凍トレーラーに乗って流浪の旅に出た。伊勢、諏訪、出羽、恐山、そして皇居へと至る道中で、御詠歌を唱え、神々との出会いに至福を分かち合う老婆と、女漁りに奔走し性の饗宴を繰り広げる若者たちの、珍妙無比な遍路行。滑稽と悲哀、解放と喪失、信仰とエロティシズム……。〈路地〉の先に広がる遙遠なる旅に、人間の原初の輝きを生き生きと描きだした中上健次の痛快傑作。

本公演では、『日輪の翼』をベースに、『紀伊物語』の「聖餐」、『千年の愉楽』等からも路地の物語を盛り込み、一つの作品を創り上げていきます。

中上健次（なかがみけんじ・作家・1946～1992）

『十九歳の地図』で注目を集め、76年『岬』で戦後生れとして初の芥川賞受賞作家となる。77年『枯木灘』で芸術選奨新人賞、毎日出版文化賞を受賞。「紀州サーガ」と呼ばれる濃密で重層的な作品群を創出した。代表作に上記のほか『日輪の翼』、『千年の愉楽』等。1992年に46歳で世界。



やなぎみわ（演出家・現代美術家）

神戸市生まれ。1990年代後半より写真作品を発表。ドイツ・グッゲンハイム美術館、原美術館、国立国際美術館をはじめ国内外での個展多数。2009年、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表。2011年から本格的に演劇活動を始め、美術館や劇場等で上演を重ねる。KAATでは、やなぎみわ演劇プロジェクトとして2011年に『1924 海戦』、2013年に『ゼロ・アワー 東京ローズ最後のテーブル』に取り組み、『ゼロ・アワー』は終戦70年を迎えた2015年に北米5都市を巡回した。2014年に今回の舞台として使用するステージトレーラーを横浜トリエンナーレで発表。昨年、日本4都市を巡回。京都造形芸術大学美術工芸科教授。



日輪の翼

推薦コメント (五十音順)

あの懐かしくも生々しい、オバらの哄笑、アニらの慟哭、揺れる夏芙蓉、ハチドリの羽音に現実として触れる奇跡を目の当たりにし、今ほど我々に中上健次が必要である時はない、と確信する。必見！

青山真治 (映画監督)

移動と変貌を続ける『日輪の翼』の舞台に、またどこかで遭遇できるのを私は心待ちにしている。

浅田彰 (批評家)

聖と俗、性と暴力、父性と母性、差異のヴァイブレーションが、「うつほ」にこもり疾走する。この演劇は、固有の土地と時間の中で開花する魅力的な混沌である。

齋藤環 (精神科医・批評家)

路地は、艶やかで生々しい現実だった。やなぎみわ氏渾身のトレーラーが繋ぐ、めくるめく「境界」を、今年も目撃したいです。

中上紀 (小説家)

やなぎみわは、夕闇迫る熊野の山並みを背景に、連なるトレーラーを、ヤマタノオロチさながらに、ぶん回し、運転し、魅せた。今時、そんな見世物を日本で見られるなんて…。私は、芸能の荒ぶるエネルギーの根源を目撃した気がした。

野田秀樹 (劇作家・演出家)

日輪の翼

『日輪の翼』新宮公演レビュー

劇の冒頭、満員の観衆の耳に響くのは、無数の鳥の囀りである。演劇においてことのほか「声」に重きをおいてきたやなぎみわらしい演出だ。中上健次の読者なら、ただちにあの「金色の鳥」を連想するだろう。

それにつけても特筆すべきは、その舞台装置である移動舞台車（ステージトレーラー）である。この装置こそは、今回の公演の発端にしてコアなのだ。タイワニーズ・キャバレーとも呼ばれる台湾特有のトレーラーに魅せられたやなぎは、これを演劇の舞台装置として使用すべく、日本に輸入し、自ら背景となる夏芙蓉をデザインした。これ自体が見事なアート作品ともいえる。



『日輪の翼』新宮公演 (photo: OMOTE Nobutada)

住み慣れた「路地」を追われた5人（原作は7人）の老婆が、やはり「路地」出身の若者であるツヨシらが運転する冷凍トレーラーに乗って、日本全国を放浪する。オバラは行く先々で御詠歌を唱えオカイサンを炊く。その一方で若者らは、女漁りに奔走する。

本作における5人の老婆が、彼女の代表作「マイ・グランドマザーズ」の反復に見えるのは偶然ではない。彼女の創造的反復のサイクルは、『日輪の翼』の構造に見事に一致したのだ。猥雑と崇高、土着と普遍、私小説と神話、そうした両義性に開かれた物語構造に。さらに、彼女の演劇の揮発性の美は、自立した作品でもある移動舞台車というフェティッシュによって支えられていることも付け加えておこう。

ステージトレーラーは、そのまま移動式の路地であり、中上の言う「うつほ」でもある。被差別部落に生まれた中上は、その出自ゆえに紀州サーガを書き得たと誤解されている。しかし柄谷行人が指摘するように、実は中上こそが「無根拠」なのである。彼の言う「路地」に、ヴァナキュラーな実体はない。だからこそ路地は遍在する。夏芙蓉が香り金色の鳥が囀る、ひとつの「拡張現実」として。

中上は路地を「うつほ」あるいは「ゾーンとしてのボーダー」と呼んだ。そこに単純な「境界線」はなく、中に入ったと思ったら外に出てしまうような「空間」であると。つまり「うつほ」である。そこは単なるカオスではない。聖と俗、性と暴力、父性と母性、そうした対立構造がもたらすバイブレーションがうつほにこもる。そう、差異のバイブレーションだ。中上が言うように、それはあらゆる文化の母胎であると同時に、差別を生み出す源でもある。

オバたちが去ったあと、トレーラーはすべての舞台装置を呑み込んで、蛇行しつつ去って行く。路地の後に残された更地に、ツヨシの「これからまた、俺ら旅じゃ」のセリフがいつまでも残響する。そう、旅は続き、鳥は囀り、物語は終わらない。まさに野外演劇でしか起こりえない奇跡的瞬間に立ちあった。この瞬間を目撃できた幸運に感謝したい。

中上がそうであったように、やなぎの演劇も進化し続けることだろう。

(REAL KYOTO 掲載より抜粋)

斉藤環(精神科医・評論家)